

留学報告書 (2016年12月)

Funai Overseas Scholarship 2016年度 奨学生 今里 和樹

1. はじめに

7月に渡米し約5ヶ月がたちました。この5ヶ月だけでもトランプが当選、シカゴカブスが108年ぶりのWS制覇、Northwesternの教授がノーベル賞受賞と本当に刺激的な毎日をごさせていただいております。初の一人暮らしということで多少の苦労はしましたが、周りのみんなに助けをもらいながら何とか生きて来られました。渡米して最初の報告書ということで生活の立ち上げやこちらに来て感じたことを簡潔に述べさせていただきますと思います。

2. 授業・研究

PhDプログラムの大部分を占める重要事項ですが今回はまだ評価するには早いと思いますので簡単に。9月の終わりから始まった学科の授業は3科目を履修しています。演習問題を解くのが久しぶり、かつ専門を変えたこともあり、鈍った頭を叩き起こすのは一苦労でしたが、徐々にペースをつかめてきたかなというところですが、つかめてきたところでもう学期が終わってしまうのですが、、、日本と違うのは週に同じ授業が三、四回あること、宿題がハードだということでしょうか。クウォーター制ということもあり、いわゆる短期集中型なのだと思います。宿題もかなり苦勞していますが、日本で学部生をやっていた頃の実験レポートと比べてそこまでつらいと言われるとそうでもないような気がします。まあ正確には忘れました。学校によっても大きく違うと思います。

早めに渡米したということもあり、研究に関しては一通り実験をできるようにはなってきました。船井奨学金の先生方にアドバイスを



図1 Northwestern Universityの
ゲートウェイアーチ

いただいたように、授業が始まる前のある程度手を動かせるようになるのは大事だと思います。授業が始まってから同時にこなすのは至難の業だと思うので。ただ研究内容の理解はまだまだ追いついていないのでこれから学ぶべきことがたくさんあり、楽しみです。研究のスタイルは日本と同じように研究室の先生によって大きく異なります。比較的少ない人数でコミュニケーションを大事にする先生もいれば、ビジネスライクに多額の研究費を持ってきて、多くの生徒を雇いながら幅広い分野の研究を進めていく人もいます。指導教員選びはその後の研究生活を大きく左右する最も重要な要素ですのでどこに行っても大事だなと思います。

3. 街 (Evanston)

Northwestern UniversityがあるEvanstonはシカゴの北、車で30分くらいのところにある、人口10万人以下の小さな街です。学生街であることは間違いないのですが、同時にシカゴに通勤するための高級住宅街という側面もあるのでかなり住みやすい街だと思います。夜ご飯食べてから実験を先に研究室に戻ったりもできて、環境の面では全く不満はありません。とても静かで安全すぎて、アメリカにいるということを忘れてしまいそうなので、あまり油断しすぎないように日々自分自身に言い聞かせています。

シカゴの冬は相当寒くなるようで、会う人会う人にこれから寒くなるよーと脅され戦々恐々としておりますが、11月までは日本より少し寒いかなくらいでそこまで厳しさは感じていませんでした。しかし先週初めて少し雪が積もったのを境に、来週は華氏でマイナス(-20°C)という未知の領域に入るのでついに来たかなと半分楽しみに待っています。

4. 食事

期待はしていませんでしたが日本には遠く及びません。Evanstonに吉野家があれば週8で行ってしまうレベルです。物価も基本的には高いので(1食最低15\$)、高くせにまづいというテンションの下がる経験は避けられません。しかし、これを逆手にとって、全く料理をしたことがなかった自分が料理をほぼ毎日しています。こっちに来て一番伸びたのは英語でも勉強でもなく料理の腕かもしれません。(笑)

自分で料理を作っているぶんにはそこまで値段の高さも感じませんし(日本で買い物したことほとんどないのに判断できるのか)、お肉とビールが安いのはとてもありがたいです。ビール好きの僕にはどこに行ってもたくさんの種類のビールが安く買えること、雰囲気の良いバーがたくさんあること、それだけで料理のまずさをカバーして余りあるメリットです。とはいえ、たまにアメリカな食事が食べなくなった時には圧倒的なボリュームと肉々しさを誇るハンバーガーや、名物のシカゴピザをすぐ食べにいけるのでちょうどいいバランスかなと思っています。

5. サマースクール

正式に PhD プログラムに入る前の 8 月に International School のサマープログラムに参加させていただきました。いろいろな学部から主に PhD に入学する留学生が集まって、英語の授業やさまざまな文化交流をするというプログラムです。だいたい 15 カ国から 40 人程度の生徒が参加していたと思います。驚くべきことは、日々授業に出て、いろんなアクティビティに参加させてもらえるにもかかわらず、授業料はタダ、なぜか生活費まで出してもらえるという好待遇だということです。私は幸運にも Materials Science Dept. から推薦をいただき、参加することができました。アメリカの生活になじむとともに、たくさんの友達ができ、このコミュニティはこちらで生活する上で大きな支えになっています。この期間がなく、こちらに着いたとたん授業が始まっていたらやっていけたらどうかと考えると、全く自信がないといえるくらい手厚い準備期間でした。多くの学校がこういったプログラムを持っていると思うので興味があれば探してみることをおすすめします。

6. その他、気づいたこと

こちらで過ごしてみて実感したのは、大学の選択にその土地の雰囲気とか気候をもっと考慮してもいいかなということです。アメリカ、ヨーロッパを含めて考えると至る所に優秀な学校があるわけで、日本の中だけでは得られないようなバリエーションがあります。その中で日々の気候は身体的にも精神的にも大きく影響を及ぼすので実際に訪れてみて自分の肌に合う、合わないの判断をするということは大事だと思います。

ます。ここまでの Evanston の気候はとても気に入っていますが、同じことが冬を越しても言えるかどうか。次の報告書を楽しみにしてください。あと天気の話話を奪われると英語でしゃべれるトピックの大部分が奪われてしまうので僕にとって、四季は必要だなーと思いました。だいたい初対面の人と話すときは“シカゴの冬、寒いんでしょー”から入りますね。

学位留学を考えると多くの人が一度は、海外に行くなら日本の博士課程に通いながら、または企業からの派遣で行く道もあるのではないかと疑問を持つと思います。確かに金銭的な面では待遇がいい部分もあるかもしれませんが、やはり直接入学するのとは大きく異なると感じます。まず、同期とのつながりが強いということ。一緒に入学した同期とはかなり仲良くなりますし、一緒にお昼を食べたり、宿題を解いたりするなかで、こんな考え方をするんだなと気づくこともたくさんあります。テスト終わりにみんなで慰め合いながらバーに飲みに行ったり、サンクスギビングのパーティーをみんなでやったり、コミュニティの中に浸っているからこそできることもたくさんあるなと感じています。もう一つは学校に対する思いが違ってくるのではないかと考えています。Visiting で来ている研究者がわざわざ学校の部活の応援に行ったり、日々校内で行われている講演に参加したりというのはまれなことではないでしょうか。慶應にいたときも三田祭とか早慶戦ですごくもりあがっていましたが、もし外から研究をしに来ている身だったらどこまで盛り上がりたかどうかと、考えるとそこまででもないような気がします。個人の意識によるのですがどうしても Visitor だと研究室主体になりがちなので、それ以外にもいろいろなことを体験したいというタイプであれば学位留学の方が合っているように思います。



図 2 初雪後の図書館前(クリスマスに向けてキャンパス内の木が徐々にライトアップされてきています)

4. 終わりに

初めての一人暮らし、初めての海外生活ということで不安ばかりでしたが、周りの人に支えしてもらって思った以上に楽しい生活を送らせていただいております。このような刺激的で充実した毎日を送らせていただける機会をいただいた船井財団には大変感謝をしております。今後も精進して一日も早く恩返しができるように努力していく所存です。